
ハイスクールD×D～恥痴龍帝 見参～

天笑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハイスクールD×D〜恥痴龍帝 見参〜

【Nコード】

N0115Y

【作者名】

天笑

【あらすじ】

兵藤一誠に憑依？転生？をしてしまった俺。
ちよいとばかし神……という名の変態から特典も貰った。
しょうがない。
頑張って生きていきますか〜。

この作品はエロ5・ギャグ2・バトル2・シリアス？1の割合で提供します。

そして主人公最強、ハーレム、主人公無双、変態仮面は無敵、等々色々なカオスが含まれていますのでそれらが嫌な方は読まない方が良いでしょう。

神……だと？（前書き）

作者は勢いだけで書いてます。

ご都合主義やら適当な箇所がありますが、生暖かい目で見守って下されば嬉しいです。

それでは始まります。

クロスアウツ！

神……だと？

「気がついたか？若人よ？」

目の前の人物？はそう言ってきた。

だが！！

俺はまた目を閉じた。

（うん。悪い夢だ。

うん。俺は何も見なかった。

うん。目が覚めればきっと輝かしい朝陽が俺の視界を照らしてくれる。

うん。間違いない。

うん。

俺の

視界に

ブリーフ二丁で

女性の下着を

被った

変態仮面なんて見なかったんだ!!!)

「残念ながら現実だ。若人よ。さあ股間(私)を見ろ!!! (クイツ、クイツ)」

凄まじい悪寒を感じた俺は即座に意識を浮上させ、某エクソシストに出てくる奴もビックリな動きで後退した。
後退した時に「ウホッ!? イイ動き」なんて言葉は俺の耳には入ってこない!

「(クイツ、クイツ)」

「……………(ゴクリ。)」

俺は態勢を整えた後、奴と対峙する。

股間を突き出し腰を揺らす奴。

奴の顔面には女性の白の下着（リボン付き）がジャストフィットイング。

あえて言おう。

……

……

……すごく……変態です。

対峙して2時間経った。

変態仮面が現在の状況を教えてくれた。（腰を揺らしながら）

奴は神様らしい。

そして俺は死んだらしい。

まあ死んだ時の記憶がフラッシュバックしてきたから俺は死んだのだろう。

だが！

それより！！

何よりも！！！！

変態仮面が神様だということを！！！！！！

認めたくなかった！！！！！！

俺は認めたくなかった！！！！！！

大事な事なので2回言った。

話が進まないの、それは置いておこう。

まあ死んだ俺が何故変態仮面と対峙しているかというところ

「転生……だと？」

「うむ。そうだ。(クイツ、クイ)」

「死んだら普通に転生するんじゃないか？違うのか？(ウプツ。気持ち悪い)」

「ああ、それはだな……カクカクシカジカ……だ。(ハアハア、あの蔑んだ視線と怯えたような視線が混ざった感じ……タ・マ・ラ・ナ・イ)」

変態仮面の言う事を纏めると

変態仮面が仕事中にミスをした。(ミスの内容は聞いたら嫌な予感がしたのでスルーしたぜ)

そのせいで俺死んだ。

お詫びに特殊な転生をプレゼントっフォーユー

現在に至る

らしい。

まあテンプレ……なら女神とか出てきて欲しかった……がそこは諦めよう。

「どんな世界に転生出来るんだ？」

「ふむ。私の管理する世界で「ハイスクールD×D」という世界だね。(クイツ、クイツ)」

「……まあいいや。色々聞きたいけど、聞く気が失せる。」

ハイスクールD×Dね………一歩間違えたら死亡フラグ一直線だな。

「で？特殊な転生つてのは？」

「何か力をプレゼンツしよう。」

「力………ねえ。あんま思いつかんなあ。」

「そうかね？ふむ………なら、キミが生前夢中になってプレイしていたゲームの力を幾つか上げよう。勿論、選んでくれて結構。それから全ての才能で限界突破付き。生前の経験、知識付き。他は………」

変態仮面が次々と付けていく。

長々と付けていってる所を俺はストップさせた。余計な力を貰ったら死亡フラグ一直線だからな。そして纏めると

・俺が選んだあのゲームの力を4個ぐらい。

・全才能限界突破

「まさかの逆バンジィイイーーーー……………(キラん」

こうして俺は転生した。

……………

……………

ハイスクールD×Dの主人公、兵藤一誠に。

……………どうしてこうなったorz

神……だと？（後書き）

目指せ

頂点！

変態のな！

主人公設定……かな（前書き）

相も変わらず適切な設定でごめんなさい

主人公設定……かな

兵藤一誠（転生ver）

変態仮面により転生？させられ兵藤一誠となった。

転生する時に変態仮面と遭遇してしまったので女体が恋しくなり若干？変態化した。

おっぱい超大好き。

おっぱい以外も大好き。

やる時はやってくれる男の子（色々な意味で）。

能力

1) スパロボOGsのアルトアイゼン・ヴァイスリッター・アンジユルグ・ソウルゲインの機体に換装できる能力

2) 変態的な肉体能力と魔力

3) 生前の知識や経験（原作知識含む）

4) 全才能限界突破

5) ???化

6) 赤龍帝の籠手

1) の機体換装能力については神滅具並みの力。

赤龍帝の籠手との併用で強化可能。 物語が進むにつれ新たな能力を載せていきます。

全て神（変態仮面）により魔改造化。
ただ機体色は全て赤。

2の肉体・魔力は変態仮面基準で付けてしまったのでかなり強し。

補足？

主人公の元いた世界はハイスクールD×Dの世界より上位の世界に位置している為、その上位世界である神（変態仮面）から付与された機体能力・変態的肉体能力・魔力等は特別なので悪魔の駒に影響しないし、この世界の者達に関知もされない。ただ自分の相棒となるドライグには後々機体換装能力に関して説明しようと主人公は思っている。

主人公設定……かな（後書き）

機体に関しては作者の好み。

アンジュルグ ヴァイサーガとソウルゲインに関してはおかしいだろ！というのは勘弁してください。
っっていうか色々勘弁してくださいされば嬉しいです。

さて次は

キング・クリムゾンしていくぞ！

てへ

さあ、ぬこを擬てようではないか（前書き）

久々のD×D投稿。

待っていた方がいるかはわかりませんが、お待たせしました。

後、この作品のタイトルは現在（仮）です。

表記するのを忘れてました。

すいません。

しばらくはこれでいきますけどね。

とりあえず……早速原作ブレイクしてみよう。

どしどし

さあ、ぬこを愛でようではないか

皆さんこんにちは。

兵藤一誠に転生してはや12年。

俺は現在小学6年生。

今日も未来に向けて頑張って体を鍛えています。
ただね

『相棒。今日は修行をしないのか?』

『あゝ……今日は体を休める日にしとく。そこそこ強くなっただろうし。』

今の会話は頭の中?かな。

そんな感じで話してるんだけど……。

まあともかく原作同様に《赤龍帝の籠手》も付いてきてましたよ。

5歳ぐらいから体を少しずつ鍛え始め、8歳ぐらいの時に赤いドラゴンが何か夢に出てきたから、もしかしてと思い起きた時に心の中で『おゝい』と呼び掛けたら………反応したんだよね、ドライグが。ドライグの方も何か驚いてたが。

驚いた後に我に返ったドライグは何か偉そうな口調で

「俺に気づくとは大した者だな。小僧。」

とか何とか言ってきたからイラツときた俺は思わず

「あ、悪い。今、エロ本見てるから後で。じゃっ。」

って言って、シャットアウトしちゃったんだ。

シャツアウトする時に「ちょっ、待て」とか聞こえたけど勿論、無視。

その後も何かずっと話し掛けてきてたけど勿論俺は無視。最後の方になつてくると

「俺の話しを聞いてくれ〜（泣）。いや、聞いてください〜い（泣）。うおお〜ん（泣）。」

って泣いて懇願してきた。

あまりに哀れなドライブを見て俺は

「……………二天龍…ちょー笑えるんですけど（笑）。もうちょっと放置しよ」

勿論、無視しました。

その結果……………泣き疲れたのか叫び疲れたのか何も言わなくなりました。

流石に可哀想になった俺は就寝前に精神統一の要領でドライブの所に行ってみようとしたら……………行けたよ。

やってみてビックリだったね、あれは。

まあ神様からチートっぽい肉体とか貰ってるから出来たのかな。

とりもまあドライブの近くに降り立つと……………グーグー寝てた。

再びイラッとききました。

人間イラッときたらやることは勿論

「寝てるんじゃないやねえよ！！この泣き虫トカゲエ！」

ドコッ

ぶっ叩くよね、普通。

いや……流石にちよい叩いた手が痛かったけどさ。

ただドライグの方も結構効いたみたいで慌てて起きた。

ドライグを起こした俺はその後、色々と話した……のはいいんだけど殆どはドライグの質問だったけどな。

「どうやって此処まで来た？」とか「さっきの衝撃はおまえか？」とか「精神世界とはいえ俺を殴ってちよつと痛いとか…人間かおまえ？」などなどだ。

まあそこらは割愛しよう。

とにかくドライグと意志疎通ができたから神器が発動できるかな？
と思ひ、試してみた。

……んだけど、何故か発動しなかったんだよね。

ドライグも驚きながら「こんな事は初めてだ。俺もわからん。」と言ってきた。

俺はまあどうでもいいかと思ひ、原作時期になったら発動できんだろと割り切った。

というか、発動できなくても生き残る術はあるしな。

そんなこんなでドライグとは魔法とかでよくある念話みたいな感じでよく会話をしている。

ただ……俺があまりにエロい事に若干呆れていたが。

仕方ないじゃん。

あんな変態を魂時に見たら女体が恋しくなるのは当然じゃん!?

だから俺は悪くない。

悪いとしたらあの変態仮面が悪い。

で、ドライグと意志疎通しながら身体をちよくちよく鍛えたりしてたんだよ。

今の俺、結構凄いなと思う。

12歳の段階で……軽く石を握ると砕けます。

地面殴ると……陥没します……アスファルトが。

罅が入るとかじゃなく陥没ね。

反復横飛びをちよい真面目にすると……残像拳もどきが出来た……

これにはちよつと感動した。

……とにかく……うん、あの変態仮面やり過ぎだ。

まあ……いつか。

幸いな事に筋肉ムキムキじゃないから。

とにかく今の俺はこんな感じ。

で、話を戻して

ドライグと会話しながら俺は今学校帰り。

担任の美奈子先生（美人しかもナイスボディ、ここ重要）のプリプリのお尻とバインバインのオツパイを脳内再生しながら歩いていたら

「ニャ〜オ」

「お、猫だ。しかも真つ黒。……可愛いなあ〜。」

猫発見。

あまりの可愛さに俺は夢中です。

何やらドライグが言ってきたるが猫の愛らしさの前にした俺には釈迦に説法。

猫に向かってしゃがみ込み

「チツチツ、おいで〜。」

猫呼ぶ。

すると人慣れしてるのか

「ニャア〜」

ネコキター！

ちなみに俺は猫大好きです。

俺の手に擦りよる黒い猫。

かゝいゝな

擦りよる猫の顎を搔いたり頭撫でたりしてた時に気づいた。

「あれ？こいつ怪我してら。……………結構痛そうだぞ、これ。」

後ろの右足辺りに傷があった。

猫好きな俺は

「よっしゃ。おまえ、ちょっと俺んち来い。手当てしやるから。」

と猫に話し掛けて抱き上げた。

暴れるかな〜と思ったけど、意外にすんなり抱かれた。

ほんとに人慣れしてんな、こいつ。

「ま、いいか。レッツゴー うは、ふかふかだ、こいつ。猫サイコ
オー。」

猫の抱き心地の良さに俺の気分は有頂天。

俺はそのままルンルン気分で帰宅した。

……………この後……………エライ事やってもうたと後悔する事も知らずに。

さあ、ぬこを愛でようではないか（後書き）

もし原作を知らない方がいるのなら

二天龍……ドラゴン族でもトップクラスの力の龍。

赤い龍……ドライグ。

白い龍……アルビオン。

この2匹の龍の力は神や魔王（この世界の）をも凌ぐといわれている。

はるか昔にこの2匹が大喧嘩して色々あって神器に魂を封じ込められた。

………だったかな。

セイクリッド・ギア

神器……神が造り出したもの。人間の身にしか宿らない規格外の力。

ロンギヌス

中には神滅具という強大な力を持つ神器もある。

ブーステッド・ギア

主人公が持っている赤龍帝の籠手もそれに当てはまる。

詳細はまた物語中に出てきます。

恐らく。

今の所はこんなところか。

というか、こんな説明いるのかどうかよくわかんない。

まあまた次回に。

主人公は頑張ります（前書き）

こんな感じで主人公は頑張ります。
どうぞ。

主人公は頑張ります

「……………」

「……………」

『相棒、どうした？』

ドライグが何か言ってきたが俺には返事をする余裕がない。
何故なら……………今、俺の目の前には理解したくない光景が広がっているから。

「どうした？ボーイ？そんな所に突っ立ってないで早く座りたまえ。
……………おおっと、もしかして我輩の膝の上に座りたいのかい？なかなか積極的なボーイじゃないかあ……………濡れるぜ。」

……………黙れ、てめえ。

そう思ったが口には出さない。
言った瞬間に何やら理不尽な目……………いや恐ろしい目に合いそうだから。

ちなみに俺の目の前にいるクリーチャーの容姿……………な感じのり

ーゼントっぽい感じの髪型をしてている。

しかも黒い猫耳が生えている。

紫のレオタードっぽい服をピッチリ着込んでいる。

あそこがモッコリと隆起しています。

……………オエッ

某グラップラーの主人公並みにムキムキさらにテカテカしてます。

……………大胸筋動かすな、キモイ。

黒い薔薇を加えています。

……薔薇、頑張れ。

うっすらとピンクの口紅を付けてます。

……化粧品メーカーに謝れ、てめえ。

……ごめん、これ以上説明したくない。

不甲斐ない主人公ですいません。

とにかく一言で説明するなら

へ・ん・た・い!!

なんだ。

俺が転生直前にあった変態仮面並みの変態だ。

そんな変態が少し部屋を空けたら出現してベッドに寝そべりながら扉を開けた俺を見ていたんだ。

何を言ってるか理解できないって？

安心してくれ俺も全く理解していない。

理解しても理解したくないから理解できない。

「ボーイ? どうした? そんな立ち往生してないでとにかく座りなよ。

……それとも何だい? 俺に《ピー》でもさせたいのかい? ははは、なかなかせつかちなボーイじゃないか。……だが嫌いじゃないぜ

え。」

ツツ!?

ヤバイ!

早く何か喋らないと……ヤられる!

「あんだ!?! ……もしかして……いや認めたくないんだけど……

……一縷の希望を持って聞くけど……さっきの猫……か?」

あれから何度も変態猫又に色々尋ね返した結果………違っていた。
原作キャラのエロい猫又お姉さん《黒歌》さんじゃなかった。
本当に………ほっんとくに良かった。

もし事実なら………この世界を世紀末伝説のような世界にしてるとこ
だったぜ………できないだろうけど。

とにかく落ち着いた俺は変態猫又に優しく教えて上げる事にした。

「よし………とりあえずあんた…帰れ。それと2度とくんな。俺の前
に現れていいのは美女・美少女onlyだ。変態は間に合ってるか
ら。ついでに死んでくれ。」

『相棒………いつになく酷いな。』

いやいやドライグさん。

これでも優しく言ってる方ですから。

普通なら有無を言わさず鉄拳滅殺モノですんで。

………何で頬を赤らめクネクネしてんだ、この変態猫又。

「うふおう………少年からの熱い蔑みの言葉を受けた我輩………思わ
ず勃つちまったぜえ（ウツトリ。ビンビンしてきた………見なよボオ
ーイ。」

変態猫又があそこを突き出してきやがった。
俺は思わず

「……………オエエエエーッ」

吐いた。

マジ吐きした。

考えてもみる。
筋肉ムキムキの気色悪いオッサンがビンビンのアレをピッチリした
レオタード越しとはいえ見せつけてくるんだ。
俺の反応が普通だろう。
吐いた俺は悪くない。

ゲロ臭い部屋を掃除して換気してまた落ち着いた俺。
変態猫又も手伝ってくれたのにはちよつと驚いた。

で、変態猫又に何で人間形態で俺の前に出てきたのかを尋ねたら

「ボーイに仙術を教えてやろうかと思つてな。」

つてな事を言ってきた。

仙術……ねえ。

確かこの世界の仙術って“生命に流れる大元の力であるオーラ・チ
ヤクラというやつを重視して源流にしている点”………だったか。
魔法みたいな派手さはないけど生命の流れを操作する術で魔法を使
う奴らからすれば対処法が限られてくるから仙術食らった奴は大抵
死ぬ………だったな。

ふむ………学ぶのはいいんだけど確か俺の体って………

『なあドライブ。俺って………仙術使えんの？』

『わからん。相棒は………言っちゃ悪いが魔力が全く感じられん。生
命力も並ぐらいしか無い………と思うんだが………』

『どした？いきなり黙り込んで』

『……おまえの数々の行動を思い返せば普通の人間じゃないのは嫌でも理解しているから仙術も覚えられるんじゃないか……とな。』

……何だコイツ。

まるで俺が人外みたいな発言をさらりと言いやがって……泣かすぞ、この赤トカゲ#

俺の静かな怒りを敏感に感じ取ったのかドライグが必死に弁解してきた。

『待て待て待て！？考えてもみる！精神世界とはいえ二天龍である俺を魔力強化とかせずに素手で殴って「手……ちよつと痛い」で済む奴が普通な訳がないだろうが！？俺の方なんて結構痛いんだぞ。さらに言うならいつも不思議に思ってたんだがどうやって俺の元に来てるんだ！？まだ《セイクリッド・ギア》も発動してないの！？……気合いじゃね？』理不尽だ！？相棒のチェンジを要求する！『無理』うおお〜ん（泣）、何でこんな理不尽の塊みたいなのが今生の相棒なんだあ〜（泣）』

あらら……また泣き寝入りした。

原作と違ってこのドライグは泣き虫だな。

嘆かわしい。

まあいいか、後で殴るついでに慰めに行くか。

それより今は……

「オッサン……俺ってば仙術使えんのか？」

「我輩の見る目は確かだ。ボーイには何か不思議な感じがしてなあ

……ボーイなら極められると思っただけさ。」

……こいつ…俺の“力”に何となくだが気づいたのか。
ドライブですら気づかないのに……。
まあいいや、覚えれるなら覚えとくとするか。

「じゃあ教えて。俺、頑張る。ついでに格闘術とかもお願い。俺の名前は兵藤一誠。イツセーって皆は呼ぶ。」

「そうかい。わかったぜえ、イツセー。これからしばらく熱うい修行を共に励もうぜ……。(ジュルリ)」

……早まったか俺(汗)。

とにかくいつちよ頑張って原作までにそれなりに強くなって死亡フラグを叩き折るとしよう。

……初めでも頑張って守るぞ!?

おまけ

「さてドライブ………楽しい楽しい八つ当たりタイム………もといサンドバッグタイムの始まりだ。」

「言い直した意味がない!?クツ、舐めるなよ相棒!俺とて二天龍と謳われ神や魔王すら凌ぐと言われていたんだ。いつも殴られっ放しだと思っな!?!」

「ほっほう……ならどうするんだ?」

「ごう……するんだあ(ガアアアツ)」

「赤龍帝のブレス……か。流石に強力だな……だが……」

ドガアアアアツ

「どうだ!? 殺ったか? …… なっ!?!」

「……なかなか痛いじゃないかあ、ドライグさあん。思わず《換装》しちゃったじゃん。…… つうか出来た事に俺もビックリだけど。」

「……何だそれ? …… 赤い鎧……か?」

「これか? これはアレだ。おまえをお仕置きするために生まれてきた装備……名は《ソウルゲイン》だ。本来は青い鎧なんだけど。」

「何だそれは!?! 俺をお仕置きするためって!?! ちょっとおかしいだろ、それ!?!」

「気にすんな 些細な事だ。さて……お仕置きされる覚悟は万端か? こいつのラッシュは……ちとイタイぞ……(ニヤリ)」

「ま、まで……ちょっと待「逝くぜえ!?! 《白虎咬》!」ギヤアア
-----」

UJU

主人公は頑張ります（後書き）

原作豆知識

黒歌について

原作では主人公・兵藤一誠のライバルである《白龍皇》側のエロい猫やお姉さん。
詳細はまた登場した時にでも。

ふう……主人公がまた強くなるなあ。

……原作どうしようかあ。
全く考えてない。

とりあえず……イッサーくんの貞操は無事ですからね。
後、ドライブ……頑張れ。

アーシア・アルジェント（前書き）

今回……珍しくシリアス？な雰囲気だ。

上手く書けたなんて保証はございません。

それで良ければどうぞ。

アーシア・アルジェント

はあ〜い 皆さん。

こんにちは〜。

俺は兵藤一誠。

この物語の主人公。

あれからもう何年も経ちましたよ。

今はもう高校二年生。

やりたい盛りの煩惱溢れる青少年さ

え？何？修行はどうしたって？

HHHAHA、そんなもんを聞いて何が楽しいのかわからないけど、簡単に教えてようか。

はい回想シーンどうぞ〜

「ボーイ。仙術つてのを大まかに説明するとだな「あ、大体知ってる。やり方をとりあえず教えて。後、股間を強調すんな。近寄るな。……そうかい。なかなか博識じゃないかあ。なら早速実践といこうか。」

「よろし……何故近づく？何故背後に回った？」

「なあに。ちよいと荒療治だがボーイに気を流し込み感じてもらうだけだ。襲わないさ。我輩はこう見えて紳士だからな。無理矢理は嫌いなのださあ。……ジュルリ」

「ぐっ……教えてもらおう身とはいえ何か嫌だ……襲ってきたら躊躇いなくぶっ飛ばすからな。」

「りょくかい。やるぞ。フンッ！」

「……ツツツ！？この感じ……これが気……か。」

「やるじゃないかボーイ。一回でコツを掴むとはな。なかなか教えがいがある。」

「……ふむ。じゃあ次よろしく。」

「わかったぜえ。ボーイはタフだな。」

……数ヶ月後……

「おりやつ！？」

「まだ甘い！気の練りが遅い！？そんなんじゃあ我輩を満足させるには程遠いわぁ！」

「お前を満足さすなんて誰がやるかぁ！！」

……更に月日が経ち……

ドガッ

「グッ……見事だ、イツセー。今の一撃……我輩を超えたな……」

「はあはあ……やった……ようやく……この変態に満足する一撃……食らわせた。……しんどかったあ。」

「ふっ……もう我輩が教える事はない。これからは技を磨き上げ強くなれ……イツセー。」

「応さ。……色々あんがとよ……九呂鹿。」

「ようやく名前を呼んでくれたな……まだボーイ……いやイツセーとはいたい但我輩も色々とやることがあるのでな口惜しいがこれで終わりだ。」

「……行くのか？」

「ああ……また縁があれば会えるだろう。その時には……イツセーの初物を何が何でも奪ってやるさあ。さらばだ！？」（シユタッ）」

「はっ……俺の初めての相手はもう決まってるんだよ。てめえなんかじゃやらねえ。……じゃあな。」

回想終わり

つてな感じである程度の仙術と格闘術を学んだのさ。
ちなみに強くなった俺を見てドライグが

『相棒が……強く……やめてくれ……俺に対する理不尽な八つ当たりが更に酷くなる……勘弁してくれえ（泣）。うおお〜ん（泣）』

だとさ。

H A H A H A、安心しろドライブ。

おまえに対する八つ当たりはちゃんと手加減するから。

何事も生かさず殺さずが基本なんだぜ

……あれ？俺ってこんなにSだったかな？

まあいいや、ドライブだし。

話を戻そう。

とにかく修行が終わり、日々を生きてきた俺。

最初に言った通り高校二年になってしばらくしたんだけど……来ないんだよね。

開始の幕を上げる彼女……天野夕麻改め墮天使レイナーレが。

原作では彼女が告白してきて俺がそれにOKしてちよつとの間恋人となった後に初デートして夕暮れ時の公園でロマンチックな雰囲気の中……殺される。んでからメインヒロインのリアスさんに助けられ悪魔として生まれ変わる……んだけど来ないんだよ。

あつれ〜？おかしいな〜。

ちゃんと駒王学園に入学して美女・美少女チエックしてメインヒロイン達がいるのを確認したから間違いないのに……何で？

しかもね〜、困った事にね……今、俺の目の前に金髪美少女シスターが右往左往してるんだよ。

ちなみに現在学校帰り。

彼女は原作のメインヒロインであるアーシア・アルジェントちゃんなんだよね。

まさか悪魔になる前に会うとはね……。

あ、転んだ。

……パンツをロックオン！……白……か。

グッジョブです！？

つと、それより助けないと

「大丈夫ですか？」

「あうう、すみません。ありがとうございます。」

手を差し出しながら声を掛けた俺。

彼女が英語でお礼を言いながら俺の手を取る。

うん？何？悪魔に転生してないのに何で英語が理解できるかって？

んなもん前世の知識を活用してんだよ！？

自慢じゃないが前世じゃ俺はバリバリ英語喋れたさ！

中国語・ドイツ語・フランス語も完璧さ！

何故なら……個人的にその国の女性が好きだったからだ！！

ドイツはラウルちゃん、フランスはシャルルちゃん、中国は超鈴音

ちゃん……1人作品が違うなんてのは気にすんな。

細かい事だ。

まあとにかく俺はその国の言葉なら喋れると理解してくれたらいいよ。

作者は無理ですので会話の中に《》を入れさせてもらいます。転生させてからは通常に戻します。

俺はシスターの手を引いて立ち上がらせた。

すると彼女のヴェールみたいなのが風で飛ばされた。

「……………」

俺は見入った。

束ねていたと思われる金色の長髪がこぼれ、ストレートのブロンドが夕日に照らされキラキラと光る。

そしてグリーン色の綺麗な瞳。

引き込まれそうになった。

完っ璧！美少女。

しかもぴよこんと跳ねたアホ毛も完備。

パーフェクトウ！？

まさにパーフェクトウ！？

内心で素晴らしく感動して呆然としてたら

「《あの〜…どうしたんですか？》」

訝しげな表情で俺の顔を覗き込んできたシスターちゃん。

………駄目だよ、キミ。

そんな簡単に見知らぬ男の顔へ近づいちゃあ………お持ち帰りしちゃうよ？

つと、そんな事より返事しないと

「《ゴメン、ゴメン。えっとキミは………旅行………じゃないか。》」

俺は彼女の横にあつた鞆を見てそう尋ねてみた。

………いや、違つのは知ってるんだけどね。

「《いえ、違つんです。実はこの町の教会に今日から赴任することとなりましたアーシア・アルジエントと申します。あなたもこの町の方ですか？》」

「《うん、当たり前。俺の名前は兵藤一誠。イツセーと呼んでくれ。

》

「《そうですか！よろしくお願ひしますね。》」

……グハツ!?

アーシアちゃんのニコポが発動。

俺のハートに6215のダメージを食らわせた。

くっ!?

何だこの可愛い生き物は!?

原作イツセーが超可愛いと言っていたのも頷けるってなもんだ!!

……原作ではこの子がレイナーレに殺されるんだよなあ……

助けても問題ない……かな?

そんな事を考えつつ俺はアーシアちゃんと会話をする。

彼女は道に迷ってしまい誰かに尋ねようにも言葉が通じなくて困っていたらしい。

俺は彼女を教会に案内……する事にした。

いや、してしまった。

……俺は最低だ。

彼女が教会に行けばどういふ処遇を受けるのか知っているのに……

……変に原作を弄るとどうなるか解らなくなる事を俺は怖れたんだ。

本当に……最低だ。

道案内をしようと歩き出した時

「うわあぁ〜ん!」

子供が転んで怪我をしていた。

アーシアちゃんがそれを見つけ慌てて近寄り

「《大丈夫?男の子ならこのくらいのケガで泣いてはダメですよ。

》

と言いながら擦りむいていた膝に手をかざし……

ポワッ

怪我を直した。

セイクリッド・ギアである《聖母の微笑》トウイライト・ヒーリングだ。

どんな傷でも直してしまふ神器。

例え悪魔だろうが墮天使だろうが人間だろうが。

俺が呆然としている間に母親が子供をそそくさと連れ去っていった

……アーシアちゃんに嫌な目を向けながら。

アーシアちゃんはその視線を受けながらも笑顔で手を振ってお別れをしていた。

子供の方も無邪気にお礼を言って去った。

……その笑顔はどこか寂しげだったのを俺は見逃さなかった。

俺は彼女に子供がお礼を言っていた事を教えた。

彼女はそれを聞き少し嬉しそうにした後

「《今の力……見ましたよね。あれは治癒の力……神様からいただいた素敵なものなんですよ。》」

俺にそうやってきた。

笑顔のまま。

俺は深く追及しないで

「《そうか。アーシアちゃんにはピッタリの力だな。アーシアちゃんは……優しいから……本当にお似合いの力……だな》」

「《優しいなんて！？そんな事はありませんよ！？》」

彼女は顔を赤らめながら謙遜した。

俺はそんな彼女を見て苦笑しながらそれを否定。

アーシアちゃんが優しくないなら世界中の奴らが優しくないと俺は

本気で思ったから。

俺とアーシアちゃんはお互いに否定しあう。

何か可笑しくなってきた俺達2人はプツと吹き出した後、大笑いをした。

ひとしきり落ち着いた後、アーシアちゃんを教会前まで案内。

現時点で悪魔じゃない俺は拒否反応は出なかったが……この教会から禍々しい気配だけは感じ取れた。

俺がそれを感じ取っている間にアーシアちゃんがここですと言いなから俺から離れた。

少し離れた後、彼女はくるりと振り向き

「《イツセーさん。今日はどうもありがとうございます。あのお礼がしたいんですけど》」

と言ってきた。

俺は思わず

「《いや！？いいよ、そんなの。ただ道案内をしたただけだし。俺はこれで帰るから。》」

そう返事をしてしまった。

アーシアちゃんは残念そうな表情をしつつ引き止めるのは悪いと思っただのだから

「《そうですか。それでは次に会えたら必ずお礼をしますね。なので……またお会いしましょうー！》」

笑顔でそう告げてきた。

眩しいな……。

彼女は本当に……優しくて良い子だ。

俺とは……全然違う。

俺は居たたまれなくなつてアーシアちゃんに別れを告げてその場を去つた。

……アーシアちゃんは俺が見えなくなるまで手を振っていた……。

自宅に戻つた俺はベッドで寝転びながらぼけつとしていた。
そんな俺が珍しいのかドライブが話しかけてきた。

『どうした相棒？ぼけつとして。お前らしくないな。いつもなら卑猥な本を呼んで興奮しているだろうに。』

……こいつは#

俺だつて悩む時は悩むんだぞ、バーローが。

『別に。偶にはこんな事もあるさ。今日がそんな気分なだけ。』

『……そうか。』

ドライブはそれつきり黙つたまま。

……まあいいや。

ドライブを相手にする気分じゃないし。

思い出すのはアーシアちゃんの笑つた顔。

次に寂しそうな横顔。

「……ほんと……最低だな俺。」

ポツリと呟いた俺の言葉は妙に部屋に響いた。
俺はそのまま…眠りについた。

つづく

アジア・アルゼント（後書き）

一旦区切ります。

次回はアジア編の最終回。

強引な展開になります。

先に謝罪しておきます。

すいません。

では

白騎士降臨！……あれ？（前書き）

文章が長すぎました。

最終回と言いながらも分けてしまった不甲斐ない作者です。

すいません（泣）

白騎士降臨！……あれ？

アーシアちゃんと別れた日の翌日

俺は朝からぼけーっとしながら授業を受けていた。

登校してきた俺にエロ同志たる元浜や松田がエロDVDがどうのとか言ってきたが、俺はそれを聞き流しながら2人に拳骨を食らわし黙らせてからDVDを回収してまたぼけーっとし始める。

考える事は昨日のアーシアちゃんの事。

未だにそれについて悩む俺。

……はあ、どうしたものか。

……

……

1日の授業がいつの間にか終わり帰り支度をしていたら

「こんにちは 兵藤一誠くん。」

と声が聞こえた。

俺は顔を上げる。

そこには……

「初めまして。私、天野夕麻です。ちょっと話したい事があるから……付き合ってくれないかしら？」

天野夕麻……いや墮天使レイナーレがにこやかに笑いながら立っていた。

「ここでいいかな……………」

レイナーレがそう呟いた。

俺はあの後レイナーレの言葉に了承し彼女の先導の元…………公園に連れて行かれた。

途中ドライブがレイナーレの事を墮天使だと忠告してきた。

俺は了解と言いドライブに見ているように告げておいた。

「で、俺に何か用？」

「あはは、せつかちだね。イツセーくんは。そんなんじゃ女の子にモテないぞ。」

余計なお世話です。

俺は今の俺を好きになってくれる子とイチヤイチャするんですー！
内心でそう毒づいていたらレイナーレが少し頬を赤らめはにかみながら

「まあ…………そんなあなたを好きになっちゃった私なんだけどね…………

…………イツセーくん。あなたが好きです。付き合ってください。」

告白してきた。

俺はそれに対して…………

「悪いが断る。俺はあんたとは付き合わない。」

バツサリ断った。

彼女は予想外だったのかポカンとしていた。

「えっと……あの……理由を……教えてもらってもいいかな？」

……演技だけは本当に上手いな。

腹の底では俺を嘲笑う気満々だったろうに。

こんな奴に……アシアちゃんが……俺は……

「俺はな……今の俺を好きになってくれる女の子と付き合いたいんだ。」

「イツセーくん？」

「もし……そんな女の子が現れなかったらそれはもう仕方がないって諦める。」

俺は……

「いや、だからね、私はあなたが好きだって「だから!?!」「ッ!?!」

……決めた。

「……せめて俺の知っている女の子達には……幸せになってもらいたいわって……決めた。今、決めた。」

「何を……言ってるの?」

原作なんてもう知らない。

知った事じゃない。

優しいアシアちゃんが泣きながら死んでいく光景を見てしまっぐ

らいなら!?

「俺が……ハッピーエンドにしてやんよ!!!」

先の分からない恐怖なんてゴミ箱に捨てて廃棄物処理場にGoだ!!

「あなた……頭おかしいの?意味の分からない事を「うっさい。墮天使風情が。」……今なんて?」

ははは、表情と気配が一瞬で変わりやがった。本性が出てきたねえ。

「……あの墮天使も可哀想に。」

「何だ?いきなりどうしたドライグ?」

「いや何……あの墮天使が不憫で思わずな。」

「意味が分からん。」

「経験者は語る……だ。相棒があいつを敵と認めたんだろう?ならあの墮天使の行く末は決まっているではないか。」

「一応聞いておく。おまえ……どんな想像をした。」

「雌奴隷。違うのか?」

「……この泣き虫トカゲエ。」

後でぜってーにシバく。

それと間違いだ。

『ドライブグ1つ教えてやる。』

『?』

『俺は……腐った奴は大つ嫌いだ。側に置いておくのも虫酸が走る。だからこの場合……完全滅殺が正しいんだよ。』

『……そうか。程々にな。おまえが暴れると周辺被害が計り知れんぞ。殺るなら静かに殺れよ。後……トバツチリは勘弁しろ。』

……そいつは知らん。

つと、ドライブグと会話してたらあっちをほったらかしにしちまった。

「わりいな。墮天使さん。ちょいとばかりし気を取られちまった。まああんたみたいなゴミ虫以下にも劣る腐った奴にはお似合いの扱いだったか？」

「貴様っ！？たかだか人間風情が至高の存在となる私に向かって！？」

ははっ、キレた（笑）

あの怒った顔……チョー笑えるんですけど。

「何が至高だ。他人から奪うセイクリッド・ギアでいい気になんないよ。後、あのセイクリッド・ギアはてめえが触れていいもんじゃねえ。あの子だけのもんだ。あれはアーシアちゃんの為に存在するもんだ。」

「何故…それを……」

喋るかバーロー。

呆然としてやがる。

今の内に一撃………ッッ!?

「ヒヒヒッ、不味そうな臭いがするなあ。美味そうな臭いもするなあ。」

………こいつは………はぐれ悪魔か!?

何でここに?

こいつは確かどっかの廃屋に………

「ここは退散しておこうかしらね。(バツ)」

「待て!?!………チィッ、予想外の出来事で逃がしたか。」

レイナーレが黒い翼を生やして飛んでいった。

クソ、マズツた!

俺があいつの計画を知っているとしたら無理矢理にでも計画を始めるぞ!?!?

早くしないと………な。

とにかく今は………

「ああ、残念だ。美味そうな臭いの奴は行っちゃった。残ったのは不味そうな奴じゃないか。………まあいいか。今日はこいつで我慢しようかねえ、ヒヒヒッ。」

こいつを片付けるとしますかね。

『珍しいな。相棒が敵を取り逃がすなんて……………鬼の攪乱…』と言っ
んだよな、この場合。』

じゃかましいわ!?

レイナーレside

「兵藤一誠……………あの人間が何故あの計画を……………」

レイナーレが空を飛びながら呟いた。
そんな彼女の側に

「どうしたのだ?レイナーレ。そんな顔をして。」

「ドーナシック……………ちょっとしくじったわ。それより例の計画を早
めるわよ。」

レイナーレの言葉にドーナシックが怪訝な顔をする。

「……………計画が洩れている可能性があるわ。」

「なっ、バカな。そんな事は有り得んだろっ。」

「いえ…事実よ。さっき私が接触したセイクリッド・ギア持ちの人
間が知っていたわ。もしかしたらこの管轄をしている悪魔と関わ

りがあったのかも……だから邪魔者が入る前に始めるわよ。」

「……………その人間とやらは大丈夫なのか？」

「問題ないわ。見た所大したセイクリッド・ギアではないわね。《
トウワイス・クリティカル
龍の手》。ありふれたモノよ。」

レイナーレの言葉にドーナシークは納得。

彼も人間が《龍の手》を持った程度では障害にならないと思ったから。

故に彼女らが警戒するのは……

「ならば……《へにがみのルイン・プリンセス紅髪の滅殺姫リアス・グレモリーとその眷属の悪魔か。」

「そうね。まあ悪魔風情にやられる私達ではないから大丈夫でしょうけど………万が一の為に警戒はしておきましょう。」

「了解した。カラワーナとミッテルトにもそう伝えておこう。計画を実行するのは何時だ？」

「今日……と言いたいけど準備もいるから明日の夜にしましょう。」

「わかった。」

ドーナシークはそう言いレイナーレから離れていった。

レイナーレもドーナシークが去ったのを見て移動を開始……そのまま自身の拠点へと飛び去っていった。

彼等は間違った。

一番警戒をしなくてはいけない相手を。

彼等の運命はこの時点で決定したのだ。

レイナーレside end

「はあ……リアス先輩は何をしてんだか……こんな雑魚をのさばらしておくなんてな。ドライグもそう思わない？」

「リアスとやらは知らんがこいつが雑魚というのには賛成だ。しかしまあ……」

「どした？」

「……一撃で木っ端微塵にした相棒には相変わらず驚かされるな。さっきのは何だ？以前見た鎧とは違っていたが……」

「あれか。あれは《アルト・アイゼン》って名前。特徴はさっき使った奴……と頑丈さだ。ちなみに補足すると先の一撃には気も込めた。中までぶち込んで生命の源……魂だな。それを爆散させた。その後でぶち込んだ武器を炸裂させて……身体をボカーンだ。理解できたかねワトソン君？」

『成る程。……俺には使うなよ。後ワトソン違う。』

ドライブは心配性だな〜（笑）。
相棒のお前にそんな危ない技を使うかよ、全く。
とにかく移動するか。
場所は……教会だ!?

『相棒……。』

『何だ?』

『移動するのはいいが……さっきの公園……滅茶苦茶にしたのはいいのか?』

『……俺があれを直せると思うか?』

『思わない。』

『だろ。だから気にしちゃいけない。大事の前の小事だ。』

『……そうか。』

リアsside

イツセーが立ち去った後、公園……だった場所では複数の人影が現

れていた。それは駒王学園の制服を着た男女達。
紅い髪を靡かせた巨乳な美女、リアス・グレモリー。
黒い艶やかな髪をポニーテールにした大和撫子を体現したような巨乳美女、姫島朱乃。
白髪で無表情そんな口リ顔美少女、塔城小猫（オツパイには触れるな。彼女には未来がまだある！？）
後はイケメンリア充、木場祐斗。

彼女達ははぐれ悪魔が現れたと聞いて急いでやってきたのだが……

「祐斗。はぐれ悪魔の他には何か情報はあった？」

「いえ何も。情報でははぐれ悪魔がここに向かったとしか聞いていません。」

「……そう。朱乃、魔力は感じ取れたかしら？」

「……はぐれ悪魔がいた痕跡と他には……微かですが墮天使の気配もします。」

「……墮天使……ね。ならその墮天使がやったと推測した方がいいのかしら？でも……」

リアスは周囲を見渡す。

それは……ある一点を中心に何かが発火したような後……否、惨状だったから。

ベンチは吹っ飛び、林はなぎ倒され、街灯はへしゃげていた。

爆発の中心と思われる場所は地面が深く凹んでいた。

まあ小型の爆弾が落ちたのをイメージしてくればいい。

近隣住民の迷惑にならないようにとイッセーはちゃんと公園に仙術

特有の結界を張ったので公園外には被害が出なかった。
ただそれがいけなかった。
何故なら……………

「部長。墮天使じゃないと思います。」

「小猫……………何故？」

「……………仙術の気配がありました。」

「……………それ本当に？まさか……………」

「いえ。違います。あの人ではありません。あの子の気配を間違える筈がありませんから……………」

「……………そう…ね。じゃあ一体誰が……………」

小猫との会話を終えリアスは考え込む。
仙術を使う墮天使……………は有り得ないと考える。
墮天使は基本的に魔法を中心として使う。しかも自分達の天敵である光を駆使して。

よしんば使うとしても今回の場合…はぐれ悪魔との戦闘があったならばほぼ必ず光関係の魔法を使う筈だから。
だがその痕跡は無いと朱乃が言ってきた。
朱乃がそう言ったのならそれは確実。
リアスは考え込む。

仙術を使う相手が自分の管轄にいる……………しかもはぐれ悪魔を一蹴する力量。

害があるかどうか調べなければいけない。
そう思った。

そんな時、周辺を調査していた朱乃が何かを見つけた。

「あら？これは……生徒手帳……この子は確か……部長、これを。」

朱乃がリアスに拾った物を渡す。

リアスはそれを受け取り……

「兵藤一誠……誰か知ってるかしら？」

そう呟いた後、尋ねた。

「知ってます。結構有名ですよ、彼。」

「私も知ってますわ。人づてですけど。」

「私は知りません。」

祐斗と朱乃が知っていると言い、小猫は知らないと言う。

リアスは知っている2人にどんな人物が聞いてみたら、2人は顔を見合わせてから

「えーと……卑猥な事が大好き……って言えばいいんですかね……」

「Hな事が大好きな子……ですね ふふふっ」

と言った。

リアスは生徒手帳に写った締まりの無いヘラヘラと笑ったイッセーを見ながら

「ふうん……とにかくこの子を調べようかしら。それでいいわね、皆。」

「……はい。」

リアスの言葉に3人が返事をする。

リアスは携帯で公園の修繕を依頼した後、立ち去った。
去り際に

「兵藤一誠……ね……面白そうな子。害は無さそうな感じね。」

手帳を再度見ながらそう呟いたのだ。

リアス s i d e e n d

「ぶえつくしっ!?!?」

いきなり鼻がムズムズしてきたから思わずクシャミが出ちまったよ。
ふう……きつと俺の事を噂している見知らぬ美少女がいた『相棒。
何か有り得ない事を考えてないか?顔が変だぞ?』………後でア
ルトのバンカー打ち込み決定。

まあいい。

それより今は……

『ドライブは何か感じるか?』

「ん？いや何も……というか今の俺では相棒の視界に写った相手の事しかわからん。俺のセイクリッド・ギアが発動してれば話は違ってたがな。」

そっぴりやすつかり忘れてた。

こいつのセイクリッド・ギア《赤龍帝の籠手》ってまだ発動できないんだっけ。

たぶん俺が悪魔にならなきゃ駄目なんだろうっけど……魔力関係で。今のこいつは文字通り役立たずなんだった。

『役立たずが（ペッ）』

『酷っ！？というか俺が悪いのか！？むしろセイクリッド・ギアを発動できない相棒が悪いだろうが！』

いやまあそうなんだけど……つい言葉に出しちゃったんだよ、勘弁な。

まあドライブは置いて……今俺は教会前の木に潜んでいる。勿論、気配は遮断済み。

仙術チョー便利です。

で、気配を探ってみたんだけど……何か気配がしないんだよね。あれ？

場所合ってるよね？

ここだよな？

教会っていったらここしかないし……

「とりあえず待ってみるか。もしかしたら計画準備に手間取ってるかも知れないしな。……仮眠でもしとこ。」

おやすみ〜……zzz。

『お……………う！おい』

何だ？

うっさいな〜。

静かに寝かせるよ#。

『おい！？』

『うっさいわ！赤トカゲ！？静かに寝かせる、バカ！』

『赤…トカゲ……………酷い……………初めて言われた……………俺…ドラゴンなの
に……………トカゲ扱いつて……………うおお〜ん！？』

また泣いたし、こいつ（呆）。

つたく、何なんだよ。

泣きたいのはこつちだ。

せつかくの安眠を邪魔……………安眠？

……………あゝあゝ！？
ヤバッ！！

あんまり遅いから仮眠じゃなくなつてたアーー！？

『何でドライグは起こさなかつたんだよー！！』

『だから俺は起こしただろうが!？それをお前……トカゲ扱いつて
(泣)……酷すぎるぞく、うおおくん(泣)』

………すみません。

今回は俺が悪かったです。
つとそれより今は………

『ドライブ。泣くのは後にしろ。謝罪も後でしてやるから。それよ
り今の時刻は分かるか?』

『ぐずつ………わかった。今はあれから丁度半日は経っている。』

『だから夜かよ。どんだけ寝てたんだ俺は………』

教会の中は………おっ、ビンゴオク。

地下の方にわんさか気配があるし。

上の階には………1人。

これは外道神父のフリードかね。

………どうだっついていいか。

瞬殺してやる。

『行け、ドライブ。俺の8割本気をちゃんと見ておけよ。』

『………何だ8割本気って。まあ面白いものが見れるとでも思ってお

く。(中)にいる奴ら………可哀想に(ホロリ)(泣)』

さてと………今回はこいつで行きますか。

お姫様を救うには騎士がお似合い!………ってね

「ヴァイス!!いつきまーす!?!」

リアス side

「それは本当なの？」

「はい。町外れの教会で墮天使が集まって何やら儀式めいた事をやっているそうですわ。」

「そう……下手に手を出すのはまずい……かしらね。」

朱乃の報告にリアスがそう答える。

下手に手を出せば墮天使と悪魔との全面戦争になりかねないからである。

これが墮天使全体の計画だったなら……の話だが。そんなリアスに朱乃がさらに告げる。

「部長。これは恐らく墮天使全体の計画では無いかと。一部の墮天使が暴走したものと思いますわ。」

「何故？」

リアスの問いに朱乃が自分の得た情報を教える。

「先日頂いた情報に何人かの墮天使がコソコソと動いているという

のがありました。それとその墮天使達は小物ばかり……というの。ここからは推測になります。が上の方達が何も言ってきておりません。もしこれが墮天使全体の計画なら少しぐらいは情報を掴み指示を出してくるはず。それが全く無い。加えて天使側も何もアクションを起こしてない。」

「墮天使側の隠匿が完璧というのがあるけど？」

「嫌ですわ、部長。上の方達がそこまで無能……とは思ってらっしゃらないですよ。」

朱乃の言葉にリアスは苦笑する。

リアスも予想はしていたのだ。

念のために聞いただけ。

まあそこまで慎重にならざるを得ないのが現在の状態なのだが。リアスは少し考えてから立ち上がり

「行くわよ。皆にも連絡を。」

そう告げた。

朱乃は了解と言いつと斗と小猫に連絡を取り始める。

そんな朱乃を見たりリアスはふと思った事を聞いた。

「そういえば兵藤一誠については報告がなかったけど？」

その問いに朱乃が困ったような表情をして

「それが……彼は今日欠席してまして……周辺人物から聞いた情報ですと……前に聞いた事と同じです……」

「家の方は？」

「家族関係は何世代か前を調べても普通でしたわ。後今日は家にいなかったみたいですね。小猫ちゃんが調べに行っただけです。」

それを聞いたリアスは最悪の展開を考えていた。

それは……イツセーがはぐれ悪魔に食われたと言っことを。

逃げようとした拍子に手帳を落としたのか？と。

その後で謎の仙術使いがはぐれ悪魔を滅した……そう考えたが附に落ちない点もある。

リアスはとりあえずイツセーについては後回しにする事にした。

今は墮天使の方が優先事項と思考を切り替えた。

そんなリアスに朱乃が連絡を終えていつでも行けると言ってきたので

「それじゃあ行くわよ。」

と告げ歩き出した。

朱乃もそれに続く。

リアス・グレモリーと兵藤一誠の邂逅は……間近に迫る。

リアス side end

other side

墮天使・レイナーレは高笑いを堪えるのに必死だった。
何故なら……

「もうすぐ……もうすぐよ。あれを手に入れたら私は至高の存在となる。」

「うう……」

レイナーレはうつとりとしながらアーシアを見やる……十字架に縛り付けられたアーシアを。

アーシアの胸元には何かの陣が描かれていた。
似たような陣がレイナーレの胸元に。

これはアーシアが持つセイクリッド・ギアを強引に抜き取り自身に宿す方法。

移植みたいなモノである。

これをやればアーシアが死んでしまいがレイナーレ達からすれば何も問題はない。

人間が1人死ぬだけ……いや、自分達の計画の足掛かりになるのだから感謝しろと言わんばかりの態度であった。

レイナーレの後ろに控えた3人の墮天使は

「これで我も上に……」

「レイナーレよ。約束は守るのだぞ。」

「もし約定を違えたら……解っているな？」

そう言った。

レイナーレは微笑みながら

「ええ。約束は守るわ。私がアザゼル様やシエムハザ様の寵愛を受けた後、あなた達が上に座せるようにお願いする…でしょ。わかっているわ。」

そう返事をした。

内心では切り捨てる気であるが表情には一切出さない。

実は3人も内心では幹部になったらレイナーレをどう始末してやるうか考えているのだが。

まあ似たり寄つたりの集まりである。

そんな時アーシアが意識を虚ろにしたまま呟く。

「イツセー…さん……………」

イツセーの名前を。

彼女はまた会うと言ったのに会う事ができなくなるという申し訳ない気持ちに渦巻いた。

異国の地で誰も助けられなかった自分に優しく手を差し出してくれたイツセーにお礼ができないなど申し訳ない気持ちもまた渦巻いた。

彼女は自分が死のうとしている間際でさえ他人の事を考えていたのだ。

アーシアは虚ろな意識のまま

「ごめん……………なさい……………イツセーさん……………お礼……………できそうに…
無いです。」

この場にはいないイツセーに謝罪した。

これが彼女の最後の言葉となる……………答だった。

アーシアの目の前にいる墮天使達とはぐれエクソシスト達が騒いでいる。

そんな時

ドガアアアーン!!

激しい爆発音と激しい揺れが全員を襲った。

そして……

「ハツハアー!? お姫様は返してもらおうか! ゴミ虫以下の糞野郎共!」

そんな声と共にアーシアを縛っていた拘束が解かれ誰かに抱かれた。アーシアは声に聞き覚えがあつた。

それは昨日自分を助けてくれた人の声。

また会ってお礼をすると約束した人の声。

アーシアはぼんやりと目を開け、その人の名前を呟いた。

「イツ…セーさん……?」

それに

「応さ。アーシアちゃん。また………会えたな!」

意気揚々とした声が返ってきた。

アーシアは徐々に意識が戻り視界もクリアになってきた所で………見た。

今のイツセーの姿を。

アーシアはそれを見てポカンとして

「赤い……鎧？……騎士？」

そう呟いた。

イツセーはそれを聞き取り

「お、よくわかったな。これは確かに騎士だぜ。名は《ヴァイスリッター》。意味は白騎士……なんだけど何で赤くなってんだ？……ドライグの影響か？……自己主張も大概にしるよな、あの泣き虫が。」

そう言い放った。

その後イツセーは仮面姿のままお姫様だっこしているアーシアに顔を向けて

「ま、そんな事より……助けに来たぜ……お姫様」

と宣言した。

それを聞いたアーシアは色んな気持ちがグチャグチャに混ざり言葉に出来なかった。

ただ……涙を流したのであった。

s i d e e n d

白騎士降臨！……あれ？（後書き）

原作豆知識（前回やってなかった）

堕天使

・言わずもがな天使が堕ちた種族。

堕天使達が集まり出来た組織が《神の子を見張る者》ケルキュである。
トップはアザゼルという強力な堕天使。

アーシア・アルジエント

・かつて聖女と称えられた金髪美少女ちゃん。
どんな傷でも癒やしてしまう《聖母の微笑》トワイライト・ヒーリングで色々な人を癒やしてきた。

が、ある時ひよんな事で傷ついた悪魔を癒やしてしまったのを教会関係者に見られた上に治した悪魔が被いに来たエクソシストを殺してしまった事でその罪を問われ《魔女》の烙印を押され教会を追放された。

紆余曲折を経て堕天使レイナーレの元に来た。

《紅髪べにがみのルイン・プリンセスの滅殺姫》

・原作メインヒロインであるリアス・グレモリーの二つ名。
滅亡の力を宿した彼女ならではの二つ名である。

天使・悪魔・堕天使の関係

・現在は三竦み状態でそれぞれ冷戦中。
はるか昔に大戦争を起こしそれぞれの陣営が大打撃を受けてひとまず戦争は終了した。
詳しい事は後の物語で明らかになる。

はぐれ悪魔

・眷属である悪魔が何かの理由で主から逃げたもしくは主を失った悪魔の事。
今回出てきたはぐれ悪魔は主のもとを逃げ己の欲望を満たすためだけ暴れていた雑魚キャラ。ちなみに名前はバイザー！。

はぐれエクソシスト

・何らかの理由で教会から逃げたもしくは脱退した元エクソシスト。
今回名前だけ出てきたフリードはそれなりに強くて結構有名な外道神父さん。

……次回出るかはまだわかりません！？

こんな所ですかね。

まあ分からないところがあるなら気軽に聞いて下さい。

……………頑張って調べます。

それでは次回こそ終わらせますので！

サヨナラ！

オツパイが……サンドイッチ…… (前書き)

結構描写を飛ばしてます。

分かりにくいと思います………すみませんとしか。

これが限界なんだよ (泣)

オツパイが……サンドイッチ……

アーシアちゃんの救出完了っつと。

えつと……胸元にある陣がセイクリッド・ギアを抜き取る為のモノ
でいいんだよな？

……俺が拭き取る……のは駄目だよなあ。

「アーシアちゃん。その胸元にある陣って拭い取れる？」

「えっ？あ、はい、ちょっと待って下さい……んしょんしょ……

……取れましたあ！……イツセーさん？どうしたんですか？」

「……いや何デモナイヨ。気にしないで……」

見えた！？

見えちゃったよ！？

アーシアちゃん……拭い取る為に……胸元をガバツと広げたから見
えた！？

……素晴らしいものです。

ピンク色の先端はとても良かったです！？

……あ、鼻血が……

「貴様ツ！？何者だ！」

ん？

何かレイナーレが言ってきてる。

何者だ！と言われてもな。

「ツレないなあ、レイナーレさんは（笑）。昨日は俺に告白してき

てくれたのに。夕日をバツクに頬を染めたレイナーレさん……
思い出すだけで……鳥肌が立つちゃったよ（笑）。ぶっちゃけキモ
かった。」

「……その声……あなた……まさか兵藤一誠なの!？」

おお、何か滅茶苦茶驚いてる。

そりゃそうだわな。

ただの人間と思ってた奴が天井ぶち抜いて現れたと思ったら赤い鎧
を着てるんだから……

「……死ねえ!」「」「」

おっ？

後ろの墮天使達が光の槍を。

……だが弱い。

バチイツ!

「……なっ!?!」「」「」

「ヴァイスの装甲ってかなり弱いのにそれを貫けない攻撃って……
マジよわっ。こんなんでもよくアザゼルとかに取り入ろうとしたな。
めっちゃ笑えるですけど。」

「……。」「」「」

何か言葉にならないって感じで驚愕してるし……あれ? チャン
スじゃね?

カチャッ

照準よし……ファイア

ドキュッ、ドキュッ、ドキュッ

ボガアッ、ズガアン、ドガアッ

「「「ギヤアーツ!?」「」」

はい3名様ごあくなり

「なっ!?!」

これで残るは1人。

………つてはぐれエクソシスト達は?

『相棒。悪魔被いの奴らならお前が天井をぶち抜いた時の落盤で全滅しているぞ。』

え?マジで?

何そのモブ扱い?

声の1つも無いって扱い酷いな。

『お前が言うな。お前の方が酷いからな。』

………まいつか。

手間が省けたと考えるとこ。

つてアジアちゃん?

なして睨んできてますか?

「イツセイさん！？何で殺しちゃったんですか！？」

あゝ……………ミスった。

アーシアちゃんならこう言うのは予想できたのに……………
仕方ない……………か。

「アーシアちゃん。君には俺が酷い事をしてると映るだろうけどね
……………俺は止めない。あいつらをここで見逃したらきつと第2、第3
の被害者が出る。君はそんな事ないと言うかも知れないけど俺はそ
うは思わない。ああいう手合いはね、懲りない奴らだから。」

「そんな……………けど……………ってな事は建前上の理由。本音は別にある。」
……………え？」

そう……………一番の理由は……………

「本音は……………俺の大事な友人を……………可愛いアーシアちゃんを……………
……………自分達の欲の為に殺そうとした。それを見逃す事は絶対にできな
い！それをしたら俺が俺でなくなる。だから……………あいつらに断罪
を下す！……………軽蔑するならしてもいいよ。所詮やることは殺し
……………だから。」

「……………。」

はは、黙っちゃったよ。

本当にこの子は……………良い子だな。
だからこそ……………これからは幸せな人生を送らせてやりたい。
とりあえず降ろすか。

……………

さて……

「残るはアンタ1人だな。」

俺はレイナーレに向き直る。

動けないだろうな。

さつきから照準を合わせたままだから。

「……ふふっ……フフフッ」

???

何だ？

いきなり笑い出したぞ？

狂ったかな？

「あははは、あなたは確かに強いわね。あなたをただの人間と侮つたのが間違이었다わ。………けど……出来るのかしら？」

「……何が？」

「知っているわよ。あなた……学園でよく言ってるみたいね。女が好きだとか女は人類の宝だとか……そんな女好きなあなたが“女”である私を殺せるのかしらあ？」

………成る程ね。

「それにあなたって美女・美少女が大好きだってよく叫んでるじゃない。私は自慢ではないけどそれなりに整った顔立ちをしてるわ。身体もそれなりにね。そんな私を殺す？それともし今私を見逃してくれたら……お礼に私の身体……好きに貪ってくれていいわよ。流

石にずっとは無理だけどね。」

.....。

「あらっ？黙っちゃったわね。それは肯定していると思っっているのか
しっぴっ。」

「..... イッセーさん。」

.....。

『あの墮天使..... 終わったな。』

..... 流石、ドライグ。

よくわかってる。

「なあ..... 1つ..... いいか？」

「何かしら？」

本当にこいつは.....

「確かに俺は女好きでエロくて欲望の塊だと思っ。」

「ふふ、それじゃあ」

いちいち俺の.....

「でもな.....」

「ん？」

逆鱗に触れやがるなあ！！

「幾ら女好きな俺でも腐った雌豚を抱く趣味はねえんだよ！！」

「ツツ！？き、貴様ア！言つに事欠いて私を雌豚扱いかア！殺す、絶対に殺す！！」

「出来もしねえことを言つてんじゃねえよ！？このまま楽に死なせてやるうと思つたが気が変わった。灼熱の中で悶え苦しみながら逝けや。^{アンジュルグ}換装！！」

パアアアツ！！

「クツ！？（ここはやはり逃げた方が得策ね。一撃を放つた後、天井の穴から外に）やらせると思つて！？喰らいなさい！（バサッ）」

バシユツ

「ヴァイスの装甲を抜けない攻撃がアンジュルグに効くかよ、馬鹿が。」

バチィツ

最後の悪あがきつてか。

……一撃離脱しやがった。

ははは、お誂え向きに空に逃げやがった（笑）。

その判断……間違いだぜレイナーレさんよお。

『相棒。追いかけないのか？逃げられるぞ？』

『まあ見てな。……空に逃げた事を後悔させてやる。』

『俺は派手なのを希望するぞ。』

はは、ドライブも好きだね。

まあ了解。

んじゃまあ……殺りますか

バサア！？

両翼展開！

シューウンッ

弓展開！

チャキッ

照準……オールグリーン！

いくぜ！？

「コード《ファントム・フェニックス》……！！！」

キュアアアアッ！

『ほお……火の鳥か。』

『うい。この武装の最大の攻撃だ。喰らった奴は灼熱の炎で焼き尽くされ……………』

ズツゴオアアアアアアアアツ！！！！

「ギャアアツ！！熱いアツイーッ！イア、ア、ア、ア、ア、ア、ア、ア、ア、ア、ア、ア……………」

『骨も残らず塵に帰る。……………ちなみにお前の皮膚も焼けると思うぞ。』

『……………絶対にやめてくれ。』

使わねえって（笑）。

……………ん？アーシアちゃんが目をまん丸にして呆然として……………可愛いんですけど……………お、何か喋るぞ

「イツセイさん……………天使様だったんですかあ！？」

……………何言い出してんの、この可愛い子は？

『お前の背中にある翼が原因じゃないか？』

ああ、成る程。

アーシアちゃんだったら……………間違いも甚だしいな、全く……………

「アーシアちゃん……………1つ間違いを教えてあげよう。」

「え？」

ちゃんと物事は正しく教えなきゃな

「天使には美女・美少女しかいないんだ!?!?!」

「……………そうだったんですかあ!?!」

そうなのです。

ちゃんと正しい事を

『相棒。ちゃんと男の天使もいるからな』

……………俺の中ではそいつらはいない事になってるのさあ、H
A H A H A。

気を取り直した俺は換装を解きアーシアちゃんの手を引き地下祭壇
を出た。

んだけど……………

「あなた……………兵藤一誠?」

「あらあら、珍しい所で会いましたわね」

「部長…下がってください。」

「……………。」

リアス先輩一行とエンカウトしました〜……………やばい(汗)
いくら廃虚となつてた教会とはいえリアス先輩の管轄地域で派手に
ドンパチやらかしたんだ……………何を請求されるかわかんない……………っ
てアーシアちゃん？いきなり前に出てどうしたの？

「イツセーさんは悪くありません！？悪いのは……………私です！」

……………はあ……………全く……………この子は本当に自分を大事にしないな
あ。

リアス先輩達もキョトンとしてるし
ちゃんと説明しますかね

「あの先輩。状況説明しても良いですかね？」

「えっ？……………ええ、お願いしていいかしら。」

「はいそれじ……………すみません。その前に野暮用ができました。」

「？何かしら？」

「……………？」

そんな怪訝な顔しなくてもすぐに済みますって

「……………出てこいよ。気配の隠匿がまるで出来てないぞ。」

俺は二階の大きな窓の方に向く。

リアス先輩達もそちらを向く。

そこには

「バレちった 気配は殺してたのにねえ……。……イツセーくんだけ？やるね」

イカレ外道神父フリードがいた。

「プツ、あれで気配殺してたの（笑）。おまえスゲーな。その程度で自信満々にしてるのが（笑）。チョー笑えるんですけど。それとひき逃げアタック一撃で気絶した弱っちい神父ちゃんが何のようであちゅか」（笑）。

ブハハハツ！

フリードの奴、こめかみひくつかせて必死に堪えてやがる（笑）。

ドライグ見るよ！？

負け犬ちゃんが吠えるの耐えてるよ。

めっちゃ笑えねえ？

『……………俺はあいつに同情するぞ。本当に可哀想に……………相棒と関わってしまったばかりに……………』

いや同情する価値もないだろ。

「……………クククツ、ヒヤツハツハツ！決めた！オレってば絶対に決めちゃった イツセーくん……………俺、おまえにフォーリンラブ 絶対にぶち殺しちゃ「アーシアちゃん。そんな薄着一枚じゃ寒いでしょう？上着貸したげるね」。「え？あ……………ありがとうございます」……………てめえ……………ことごとく舐めやがってえ……………（ピクピク）」

おんやあ？何か負け犬ちゃんが震えていますよ？

「……小便でも我慢してるのか？なら早くお手洗いにいきな。ついでに小便と一緒に前自身も流されてこいよ……汚物野郎。」

「ツツツ！！？ぶっころ……なっ！？身体が……てめえ！なにしやがった！？」

気づくの遅いわ、馬鹿が。

「金縛りですが。少しばかり仙術の応用でチヨチヨイとな……後……」

「「「「「なっ！？」」「」「」」

「はわあ！？イッセーさんが消えちゃいましたあ！あ、上着まで……」

皆さん驚いてます。

ちなみに俺は今……

「フリードくん 後ろ隙だらけですけど？」

「ツツ！？」

フリードの後ろにいます。

リアス先輩達も目を見開いて驚いてますな。

……驚いてるリアス先輩と朱乃先輩と小猫ちゃん……可愛いんですけど！？

「いつの間に！？」

「ん？それは秘密……なんてな。幻術を囿に気配遮断して近づいただけです。仙術ってマジ便利。後……おまえと会話するのがこれ以上面倒だから……お帰りしてちょーだい……なっ！？（ドガアッ）」

「グハア！？（ヒューン……）」

ははは、吹っ飛んでいったし。

『お前にしては優しい扱いだっただな？』

『そうでもない。今の一撃で体内の気の流れをかなり乱した。それなりの間は身体を動かそうとする度に激痛が走りまくる。あいつにやあ楽な死に方はさせないよん』

『聞いた俺が馬鹿だった。お前はそういう奴だったな。』

そんな褒めんな、照れる。

さてと汚物は片づけたし先輩達に状況説明しますかね。

「……………つてな感じですか？」

「そう……大体解ったわ。もう1ついいかしら？」

「何ですか？」

「はぐれ悪魔を退治したのもあなた？」

はぐれ悪魔……？

『お前が公園で木つ端微塵にした雑魚だ。』

ああ、そーいやりたなそんな奴。

「はい、そうですよ。レイナーレをそこで始末しようとしたら邪魔してきたので。」

「そー……朱乃。」

「了解ですわ（ガシッ）」

「……………へっ？」

何で朱乃さんは俺の腕を掴んだの？

……………いや、やーらかいオツパイがプニョンと当たって嬉し
んだけどね!？

おや、リアス先輩？

何でそんなにニコヤかな笑顔をしてるんでせう？

「兵藤一誠くん。壊した公園の修繕費……………払って頂戴。」

……………え。

「この教会を壊した件は墮天使の暴走を止めた件でチャラにしてあげましょう。でも公園の修繕費ははぐれ悪魔を討伐しただけじゃあ

……ちょっと足りないわね。だから……差し引いて残った分を払って頂戴。」

「……………いくらですか？」

「そうね〜……………ザッとこれぐらいかしら？」

……………oh〜、何か桁の数字がミエマスヨ。

リアス先輩を見ると……………めっちゃいい笑顔で手を出してるし。

横にいる朱乃先輩を見ると……………こちらもすごくいい笑顔ですね。

小猫ちゃん……………無表情で我関せずですか……………あ、欠伸をかみ殺してる、か〜わい〜。

アーシアちゃん……………オロオロしてる。

リア充……………苦笑してやがる……………シネ。

クツ……………進退極まれり……………なんてな〜。

リアス先輩……………まだまだ甘いわ！

「いいですよ。払います。一応、蓄えはありますから払えますんで明日払いにいきますね。」

「……………え？」

「あら？」

予想外の返事に先輩2人が驚いたし。

はっはっはっ！

何気に俺は100万ぐらいは貯金しているのですよ。

幼き頃からエロ本やエロDVDを鑑賞して品評したハガキを投函し続けていたら向こうの会社がコンタクトを取ってきた時……………マジ驚いた。

詐欺かと思った。

……ふっ、まあ昔の話だな。

詳しい事は聞くな。

それより今は

「現金一括払いでいいですか？」

こっちを片付けないとね。

「え……いやちよつと待って頂戴。」

ん？何か朱乃さんとアイコンタクトしてる。

何かの相談か？

あ、何か終わったっぽい……

ぷによ

ツツツ！？

朱乃様！？

なしてオツパイを押し付けてくるのでしょうか！？

「ねえ。兵藤くん。」

はわあ！？

耳に息を吹きかけないで！

「な、な、何でせう！？先輩！ひよわっ！？顔、ちかっ、近いですよ！」

「いやん。可愛い反応……兵藤くん……ううん、イッセーくんに

お願いがあるんだけどお。聞いてくれないかしら？」

「…へっ？お願い…ですか？…あのオツパイ…当たってます。」

俺の腕が朱乃先輩のオツパイに挟まれたアーーーー！！

「当ててるの それでね… 私達の仲間になって欲しいんだけど。」

当ててる…だと…！？

クツ、これは俗に言う色仕掛けというやつか！？

だがこの俺はそんな程度では屈しはしな

「仲間になってくれたら…揉んでもいいわよ？いえ…イツセ
ーくんの好きにしてくれて…いいわ。」

「マジですか！？じゃあ仲間に「イツセーさん…」…アーシア
ちゃん？」

「イツセーさん…Hな事はいけません！」

う……いや…でもね…朱乃先輩のオツパイがね……やめて！
？そんな瞳で俺を見ないでエ！

「アーシア……だったかしら？」

「ふえ？……はい、何ですか？」

リアス先輩？

「あなたも良ければ私達の仲間にならないかしら？仲間になったら

……兵藤くんと一緒に過ごす事ができるわよ（ニコッ）「

……いやいやいや、その勧誘の仕方はない「なります！？イッセー
さんと一緒にいれるなら仲間になります！」「……………何言つて
るの？この子は？

「ふふっ、そう。歓迎するわ。じゃあ後は……………」

……………何で近寄るんですか？

あれ？朱乃先輩？

何で背後に？

ぷによ、ピタッ

これは！？

前方にリアス先輩、後方に朱乃先輩が！？

で、伝説の……………オツパイサンドイッチかあ！！？？

……………アアア……………2人のやーらかいオツパイが……………女の子特
有のいい香りがアアア……………

「ねえ……………仲間になって……………イッセー。」

リアス先輩の甘い声がああ……………ははは……………もう……………いいよね？

俺……………頑張った……………よね？

……………もう……………無理イ！？

「は〜い……………仲間になります」

「ふふ、ありがとうイッセー。」

「これからよろしくお願いしますわ、イツセーくん」

こうして俺は原作とは違った形だがリアス先輩の眷属悪魔に転生することとなりましたとさ。

………そういえばアーシアちゃん………悪魔になるってちゃんと理解してるのかね？

………してないんだらうなあ。

おまけ

(ふう………何とか仲間に引き込めたわね)

リアスは内心でそう思った。

リアスはイツセーの力を危険視したのだ。

彼女……いや彼女達は空で燃やし尽くされたレイナーレを目撃した。

イツセーが放った《ファントム・フェニックス》を見たのだ。

あれを見たリアス達は困惑した。

威力にはない………魔力を感じ取れなかった事に………だ。

未知の力。

それだけでも警戒に値するのに説明や質問、フリードとのやり取りで仙術まで使うのだ。

危険視するには充分。

だがリアスは同時にこつも思った。

彼が欲しい…

と。

イツセーを眷属に出来たらかなりの戦力強化となる。

そんな思いが生まれた。

だからあんなやり取りをしたのだ。

まあイツセーが本当に危険人物なら排除も考えたのだが……

(彼……初めて見た時から私達を警戒してなかったわね？何故？…

…警戒するに値しなかった？)

そう。

イツセーがリアス達と出会っても一切警戒をしなかった。

まるでリアス達が自分とアジアにそう簡単に危害を加えないのを知っているかのように。

だからこそリアスも多少強力にでも勧誘した。

結果は先の通り、リアスの勝ち。

だがリアスはまだ知らない。

このイツセーを仲間に引き込んだのが………どれほど幸運だったのかを。

(しかし………からかい甲斐のありそうな子ね ふふふっ)

リアスはまだ知らない。

………このイツセーが………どれだけ自分に影響をもたらすかを。

UJU

オツパイが……サンドイッチ……（後書き）

原作豆知識

眷属悪魔

・悪魔には階級があります。
下級・中級・上級・最上級と。

詳しいことは恐らく話しに出てきますがとにかく上級悪魔から眷属を持つ事ができます。

眷属悪魔にするには《イヴァル・ピース悪魔の駒》を埋め込む事。
種族は問わない。

駒はチェスの駒と同じです。

女王1・戦車2・僧侶2・騎士2・兵士8です。

眷属にする相手の能力が高ければ駒消費が激しいです。

要するに兵士2個分の力を持っている相手を眷属にするには兵士の駒を2個使う……といった感じですよ。

ただキング…主の能力が高まれば駒を使う消費も抑える事ができる。
例）現在のリアスがイツセーを眷属にするには兵士8個分必要です。
だけでもしこの時に眷属にせずリアスが修行をして能力を上げて後から眷属にしようとするれば駒消費が7個になる可能性がある。

といった感じです。

これについては今のリアスは知りません。

制作者の隠し要素なんです。

これもまたいつか話しに出ます。

もう1つ。

これは今のリアスも知っている事ですが駒には《ミニョーテーション・ピース変異の駒》がある。

これは駒を複数使い眷属にしなければいけない相手を1つで済ます事ができるというイレギュラー。

制作者も予想外だったが面白いと理由で放置したみたいです。
上級悪魔で駒を所持している者達は一個ぐらいはあるそうです。
これもまたいつか出ます。

補足

眷属悪魔になるという事は転生するという意味合いだそうです。
この世界ではそうなっている。
悪魔になれば身体能力の向上とかメリットがありますが聖属性に対
しての抵抗が著しく低下する。
聖書の一部を読み上げられたら苦しくなったり聖水を浴びたらダメ
ージを食らったりなどです。

こんな所ですかね。

……………豆知識…いりますか？

本編では恐らく描写とか説明とかを飛ばしたりするから書いてるん
ですが……………。

後説明に間違いがあれば教えて下さい。
直します。

では。

驚愕の事実…発覚（前書き）

色々のご都合主義的な所がある……

細かい事は気にしないで。

皆さんがそんな心の広い持ち主だと信じてます。
では、どうぞ

驚愕の事実…発覚

「……………という事よ。2人共、解ったかしら？」

「俺はOKです。アジアは？」

「私も大丈夫です。」

「そう…なら次は……………」

現在俺はアジアと共にリアス先輩の悪魔講義を受けてます。日にちはあれから少し経った。

悪魔に転生した後は流れるに言えば原作と似た感じ。

アジアの学園編入と俺の家にホームステイする事がだ。で、アジアの周辺処理が終わって落ち着いた今日、リアス先輩達が所属しているオカルト研究会の部室に呼ばれ悪魔講義を色々受けているという訳だ。

あ、説明終わった。

「とりあえずこんな所ね。質問とかは……………ないのね。じゃあ私達から質問があるんだけど……………」

おや？

何か皆の視線が俺に集まってる……………いやん、リアス先輩達に見つめられたら興奮しちゃう……………すみません調子に乗りました。

「アジアの方は大体話しを聞いたからいいとして……………イッサー、問題はあなたよ。」

「俺っすか……何かしましたっけ？」

「……………はあ。」

溜め息つかれた。

……………しょぼん。

ん？小猫ちゃんが手を上げた？

「どしたの？」

俺は小猫ちゃんに聞く。

「先輩は仙術を使ってましたよね？誰に教わったのですか？」

……………ああ、それね。

別に黙っておけと言われちゃいないし……いいかな。

「変態猫又の九呂鹿だけど」

「ツツ！？……………変態猫又？」

小猫ちゃん表情が険しくなった……………と思ったら首を傾げた。
まあ当然の反応だわな。

「そつ。小猫ちゃんが何で険しい表情したのかは聞かないけど……
俺の言う九呂鹿っていう変態猫又の容姿は……（説明中）……………だよ。
つて、何を驚いてるのさ？」

何か小猫ちゃんがすごく驚いてるんですが

「え〜と、そんな所です。俺実はセイクリッド・ギア持ってます。部長が兵士の駒を8個消費したのもそのせいです。全部ドライブのせいです。」

「ドライブ…ですか？それがセイクリッド・ギアの名前ですか？」

「いや違います。セイクリッド・ギアの中にいるドラゴンの名前ですよ。」

「ドラ…ゴン…？」

「あい。」

流石の朱乃先輩もドラゴンとは予想してなかったのか呆然と呟いたなあ。

『おい相棒。どういつつもりだ？』

『ん〜、まあ面倒くさいからお前に丸投げした。口裏合わせろ。いない？』

『……………わかった。』

よしドライブの根回し終了。

「イツセー、そのセイクリッド・ギアの名前を聞いてもいいかしら？後、一度発動してみて頂戴。」

「いいですよ。発動は一部だけでいいですか？」

「いいわ。」

よし、これでOK。

ドライブグ……喜ぶ。

おまえを顕現させてやるからな。

「んじゃ先に発動しますね。……おら、さっさと出てこい。泣き虫トカゲ。」

『だからトカゲじゃない!?俺はドラゴンだあ!』

カアアアッ

おお、左手に籠手が出てきた。

……やっぱり悪魔転生が条件だったか。

「これは!?!」

「あらまあ……」

「籠手……後は龍の紋章……」

「……赤い。」

「ふああ……」

皆さんの反応はまちまちですな。

リアス先輩だけは気づいたようだな。

「さて発動しましたよ。で、こいつの名前は「フーステッド・ギア《赤龍帝の籠手》」……
…神滅具の1つ……」……リアス先輩、正解です。」

「……!?!?!」

「神滅具……ですか?」

アーシアだけ解ってないね。

仕方ないけど。

後で教えてあげようかな。

とりあえず先に……

「おい……(ドガッ)」

「……はっ!?!?!」

籠手を椅子の角にぶつけましたが何か?

おっ、宝玉が光り出した。

「痛いだろうが!?!?!?っていつか何で籠手をぶつけただけで俺に痛み
がくるんだ!?!?!」

「諦める、ギャグ補正だ。仕方ない。それより挨拶しやがれ泣き虫
ドラゴン。」

「ギャグ補正って(泣)……もういい。相棒のやる事にはもう諦め
た。……リアス・グレモリーとその眷属悪魔達。俺はドライグだ。
相棒共々よろしく。」

まあ適当な自己紹介だが許しておくか。

……何か皆さんポカーンとしてらっしゃいますね。
あ、リアス先輩が何か言うぞ……

「え〜と……とにかくよろしく。……で、本当に赤龍帝なの？二天龍と言われた……あの？」

「そうだが。何か問題でもあるのか？」

………何でこいつは偉そうに言ってるんだ？

リアス先輩はおまえよりヒエラルキー的に上だぞ、ゴラア。

「さっきのやり取りを見ていたら……ちょっと……ね。気分を害してしまっただならごめんなさい。」

いやいやリアス先輩が謝る必要ありませんって。

全部こいつの「そうだ！？リアス・グレモリー。お前、相棒の主になっただる！ならこいつの横暴を止めさせてくれ！」………おいら、何を言い出してやがる#

「？どういう事？」

「こいつときたら何かと言えばすぐに俺を殴るわ、蹴るわで酷いんだ！この前なんて何も言っ「何言ってるんだ、ゴラア！リアス先輩に告げ口とはいい度胸してるじゃねえか、この赤トカゲエー！」なっ、相棒！？お前いつの間ここに！？クツ、いつもやられっぱなしだと……それは反則だろ！ギャア………」

「えっと……どうなってるのかしら？」

「今………宝玉からイツセーくんの声がしました…わよね？」

「僕も聞きました……」

「イツセー先輩……目……瞑ってます。あ、開いた。……籠手……消えました……。」

「つたく、あのバカドラゴンめ。」

「帰ったらまたお仕置きして……あ、先輩達をほったらかしにしてた。」

「謝らないと」

「すみません。ちょっとドライブは諸事情により引つ込みました。後あいつの言ってた事は気にしないで下さい。只の戯れ言です。」

「そ、そう。まあその辺りは追及しないでおくわ。」

「そうして下さい……ん？アジア？」

「イツセーさん……ドライブさんに酷い事しちゃダメです。」

「ぐっ……いや、あのねアジア。あれは「ダメです!?!」……」

「……うう、了解しました。」

「『……アジア・アルジェントオオ。ありがとお……ありがとお……うおおくん（泣）。ようやく相棒の横暴を止めてくれる奴があ。お前は俺の恩人だ。うおおくん（感涙）』」

「このクソトカゲがあ#。」

「……アジアの知らない所でぜってー泣かす。」

あれからリアス先輩達の質問に答えていった俺。
まあ当たり障りのないような返答をしていったが……とにかく終わ
った。

で、早速悪魔稼業である契約を取る仕事をやる事になったんだけど
……………何となく予想してた。

俺は原作イツセーみたいに転移陣が発動しなかった。

リアス先輩が言うには魔力が低すぎるらしい。

これを聞いた俺は前々から予想していた事に確信を持てた。

俺が変態仮面から貰った力はどうもこの世界の人達には感知されな
いみたいだ。

たぶん二次元が三次元を認識できないだとか何とかそんな所だろう。
要するに変態仮面から貰った力は何気に凄いと理解してくれ。

そんな話しはもう脇に捨てて……とにかく悪魔稼業に支障をき
たすのは問題だから俺はとりあえずアーシアと一緒に悪魔稼業をす
る事になった。

アーシアは魔力が豊富みたいだから俺と一緒に転移しても問題ない
らしい。

……………羨ましくなんてないよ。
ほんとだよ。

俺だって仙術とか使えるもんね!?

ちなみに小猫ちゃんが仙術を教えて欲しそうな感じを醸し出して
いるけどなかなか言ってこない。

まあ……姉の事があるから仕方ないか。

彼女が言ってきたら教えてあげる事にしよう。

何はともあれ俺の悪魔ライフのはじまりです

驚愕の事実…発覚（後書き）

イツセーは気づいてません。

変態仮面から貰った魔力を使えば……転移ができる事を。
貰った力は感知されないだけで使う事はできるのに……
まあ、彼は……基本的にバカですから。
その内気づきません。

さて……次は日常パートを作ります。

最近、イツセーくんがエロから離れていつている。

これは由々しき事態だ。

だから日常でエロエロ成分を補給する。

具体的にはオツパイとかお尻とかオツパイとか太ももとかオツパイ
………すいません。

脳がやられています。

勘弁を。

それでは

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0115y/>

ハイスクールD×D～恥痴龍帝 見参～

2012年1月9日00時45分発行